

令和六年度「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクール  
警察庁犯罪被害者等施策推進課長賞 受賞作品

『命の大切さを学ぶ教室』

群馬県

前橋育英高等学校 三年

上村 愛うえむら あい

交通事故。それは毎日耳にする言葉であると同時に毎日聞き流してしまっている言葉だ。なぜなら交通事故は毎日起こっているのにも関わらず、自分には関係がないと誰もが思っているからだ。

二〇〇八年二月十七日、その日までは小沢さんも私達と同じ考えだった。その日の夜、彼女と彼女の家族は飲酒運転の交通事故に巻き込まれた。お義父さんとお義母さんが亡くなりその日から交通事故は彼女にとって自分には関係がないとは思えなくなった。「被害者」となった家族は辛い経験を経たことを聞いた。

特に心に残ったのは夢をあきらめることにした妹の話だ。この事故により鼻の骨を折るなどの重傷を負い顔に傷が残ってしまった。彼女はずっと夢だった保育士という職業をあきらめざるを得なかった。傷だらけの自分の顔を子供たちに見せることができない、という自分自身の意志でだ。しかし、この話を聞いて私は加害者に夢をあきらめさせられたと思った。その事故によって、加害者によって顔も夢も壊されてしまう。本当に恐ろしいと思った。

小沢さんは「一瞬のできごとで当たり前がなくなった」と言っていた。その当たり前とは洗濯をする、温かいご飯を食べる、といった私達が今、何とも思わず普通に行っていることだ。もし私が当たり前の生活ができなくなったら耐えることができるか分からない。自分の時間もなくなり、したいこと、行きたい所、全てを奪われる。私は自由な時間をも去られることが怖いと思った。そして小沢さんは被害者になって毎日病院に行くような生活になった。今までの当たり前がなくなり新しい当たり前が病院に行くことへと変わったのだ。思った。人が亡くなると周りの人が動かなくてはならない。「人を書類上で消すということは家族はとても大変だ」彼女が言っていた私の胸に響いた言葉だ。大切な身内が亡くなった後すぐに自分たちでその人を消さなくてはいけない。とても残酷であると思ったと同時に人が亡くなるという同じ辛い想いをするのではない加害者に納得がいかなかった。

最後に彼女は「人によって命をとられたが助けてくれたのも人。自分の命は自分で守るしかない」と言っていた。私は誰かの命を奪う側ではなく誰かの命、生きることを助ける側でいたいと強く感じた。また、自分の命を守るのは自分自身なのだから、何かあったときにすぐ自分を守る態勢に入ることが大切だと思った。そのためには一人一人がこのことがあつたらこれをする、などの知識を持つておく必要があると考える。そして直接命を奪う加害者

にならなくても間接的に加害者になる可能性があるため、自分の行動一つ一つに責任を持ち、実行する前に一度考えることが大切だと思った。

私は今回、この講座を聞いて交通事故が少し身近なものになったと思う。あまり見ていなかったニュースを見たり、新聞を覗いてみたり意識が変わった。インターネット上でもニュースが見れたりするため、たくさんの人が交通事故、というワードに目や耳をすましてほしと思う。交通事故は一瞬で何もかもを壊してしまう。自分には関係がない、そう思わないところに意味があり、数多く起きている交通事故を減らすことが出来ると感じる。自分は大丈夫、そう思っていることで交通事故に遭う危険性は高くなると思う。交通事故により悲しむ人が減ることを願うばかりだ。